14.子ども食堂の意義：「見守り」という役割

御宿智也

はじめに

私はこれまで約 2 年間子ども食堂という活動に携わってきた。月に 1 回程度だが、大府市にある、横根山集会所で開催されている「大府子ども食堂　ふれあい食堂」に学生ボランティアとして参加させてもらってきた。ここでは子どもや地域の人と食事をしたあと、レクリエーションをして、地域の人と交流をしてきた。また、日進や三好の子ども食堂に行き見学させてもらうなど、さまざまな子ども食堂を見てきた。

最初は貧困の子ども向けの食事提供場所だと思っていたが、それに限ったことではなかった。地元の高齢者、一般の親や子どもなどが来て地域の居場所というものになっていた。レクリエーションが開催されている子ども食堂では子どもから大人、高齢者までみんな笑顔を絶やさずに楽しんでおり、地域の人の温かさを多く感じられ、これからもボランティアという形で支援を続けていければと思った。

今期、子ども食堂の実態調査をするために、運営者と利用者にそれぞれアンケート調査を実施した。その中で特に私が注目した点は、子ども食堂の意義を問う項目である。子ども食堂はどのような人のためにあるのか。また何のためにあるのか。そのようなことがアンケート結果から導き出されると考えた。

子ども食堂の対象者について、アンケートでは、①生活困窮家庭の子ども、②子どもなら誰でも、③子ども以外を含めて誰でも、④その他、といった選択肢を設けた。「子ども食堂」というネーミングから子どもだけではと思うが、実は地域の人々全体に開かれた食堂であるのではという認識からである。

実際にボランティア体験での感覚になるが、子ども食堂には実にさまざまな立場の人たちが参加している。そこにいると子ども食堂には食堂という側面だけではなく、「見守り」という役割があるのではないかと感じる。このことをアンケート結果から考察してみたい。

研究方法

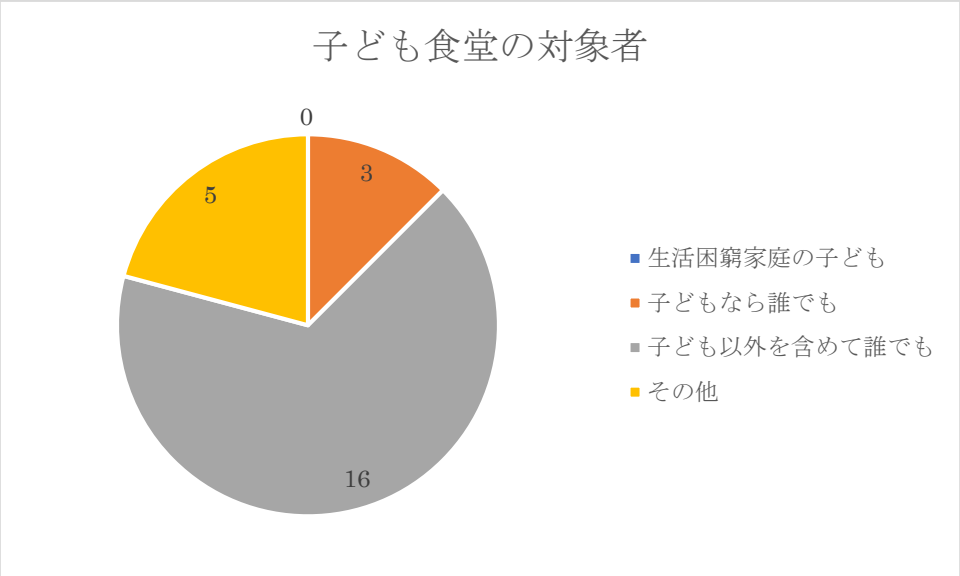
愛知県の子ども食堂についてのアンケートを行った。時期は平成 30 年 10 月～12 月頃、対象は愛知子ども食堂のネットワークに参加している団体の運営者と参加者である。

考察①

子ども食堂の対象者についてのアンケートを以下の通りに行った。その結果とともに次に示す。

Q8 子ども食堂の対象者について当てはまるものを 1 つお選び下さい。

1. 生活困窮家庭の子ども 2. 子どもなら誰でも
3. 子ども以外を含めて誰でも　　4. その他（　　）



①の選択肢、「生活困窮者の子ども」を対象にした団体は 0 であった。
②の選択肢、「子どもなら誰でも」を対象にした団体は 3 であった。
③の選択肢、「子ども以外を含めて誰でも」を対象にした団体は 16 であった。
④の選択肢、「その他」を選択した団体は 5 であった。

子ども食堂を開催している団体は、ほとんど「子ども以外なら誰でも」を選択されていた。「子ども」食堂と言ってはいるが地域の親や高齢者も来ていることが分かる。一方、生活困窮者を対象にし、子ども食堂を開いている団体は私たちがアンケートを行った中で 0 だった。子ども食堂＝貧困のイメージで開催されているわけではないことが証明されている。

考察②

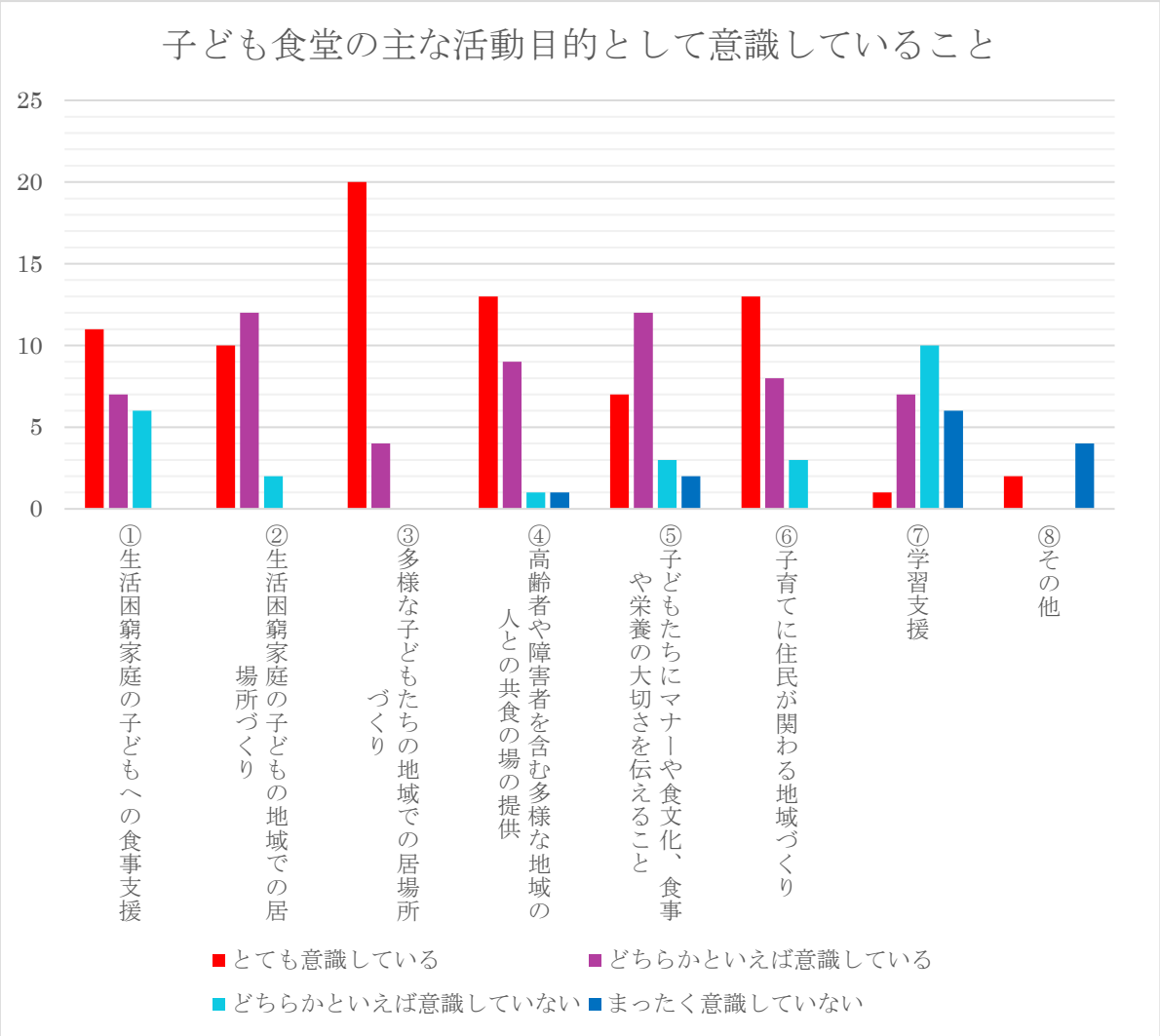
子ども食堂の主な活動目的を問う質問を以下のように行い、その結果とともに次に示す。

Q18 子ども食堂の主な活動目的として意識していることはなんですか。下記の各項目について、「とても意識している」から「まったく意識していない」の中から当てはまるものを１つお選びください。

	選択肢（それぞれ１つに〇）			
	とても意識している	どちらかといえば意識している	どちらかといえば意識していない	まったく意識していない
１）生活困窮家庭の子どもへの食事支援	1	2	3	4
２）生活困窮家庭の子どもの地域での居場所づくり	1	2	3	4
３）多様な子どもたちの地域での居場所づくり	1	2	3	4

4）高齢者や障害者を含む多様な地域の人との共食の場の提供	1	2	3	4
5）子どもたちにマナーや食文化、食事や栄養の大切さを伝えること	1	2	3	4
6）子育てに住民が関わる地域づくり	1	2	3	4
7）学習支援	1	2	3	4
8）その他（　　）	1	2	3	4

研究結果②



アンケート結果を順番に見ていく。

①の生活困窮家庭の子どもへの食事支援の意識の有無であるが、やはり子ども食堂のき

っかけである子どもの貧困を意識して作っている団体があるのは当然であるが、意識していない団体も 6 団体存在する。これは注目すべき数値であると考える。

②の生活困窮家庭の子どもの地域での居場所づくりでは意識している方は 21 団体、意識していない団体は 2 団体ある。

③の多様な子どもたちの地域での居場所づくりでは、意識している団体が 24 団体、意識していない団体は 0 団体である。これを見ると、生活困窮家庭だけではない、多様な子どもたちへの居場所づくりとして子ども食堂が機能していることが分かる。

④高齢者や障害者を含む多様な地域の人との共食の場の提供、⑤子どもたちにマナーや食文化、食事や栄養の大切さを伝えること⑥子育てに住民が関わる地域づくり、に関しては、いずれも意識している団体が多いことは分かるが、意識していないと回答してくる団体もあり、これは各子ども食堂の個性によるものだと考えられる。

⑦学習支援では意識していると回答した団体が 8 団体、意識していないと回答した団体が 16 団体であった。学習支援は対応するボランティアの人数不足が背景にあると考えられる。私も三好の子ども食堂で学習支援のボランティアを任されたが、準備不足ということや子ども 1 人にかかりきりになってしまい、人手不足を痛感した。このようなことから学習支援を活動目的として設定している団体は少ないものと思われる。ただし２次的な利用方法として考えている団体も皆無ではない。

おわりに

ここまで子ども食堂の意義について考察してきた。「子ども」と言ってはいるが、実は子どもだけではなく「多様な地域の人々」のものであり、「食堂」と言っているが「地域の居場所」であるということが今回の調査で分かった。

『子ども食堂つくろう！人がつながる地域の居場所づくり』（NPO 法人豊島子ども WAKUWAKU ネットワーク・明石書店・2016 年）の中で、WAKUWAKU 理事長・栗原知絵子さんは次のように述べている。以下は本の引用である「社会的弱者の中でも、最たる弱者の子ども食堂の声を、こちらからキャッチするには？そのために、WAKUWAKU では子どもとナナメの関係の大人が子どもたちと出会う場、関わる場をつくり、子どもが困りごとをつぶやける場を地域に点在化することを目指しています。「ナナメの関係とは、親（親の関係）でも、友達（横の関係）でもない人のことを指します。例えば、毎週 1 回、ご飯を食べに来ていた母子家庭の S 君は「親と 2 人でいると、息が詰まる」と言って、学校や家での出来事やイヤだったことを話していました。友達にいじめられていることを親には言えず、学生ボランティアに打ち明けた子もいました。受験サポートをした T 君にしても、親でも友達でもない私にだから、「高校にも行けないかもしれない」とつぶやけたのでしょう。子ども食堂は、子どもやママが安心して困りごとをつぶやける空気に満ちあふれています。市役所や相談窓口とはちがい、先生でも専門職でも親でもない、地域のおばちゃん、おじちゃん、学生ボランティアが「場」をつくっているから、つぶやけるのだと思います」

私はこの、「多様な地域の人々の居場所」に「見守り」の役割を見出すことができる。子ども食堂は当初、生活困窮家庭の子どもへの食事支援という概念を持ち作られたところが多い。しかし実際の子ども食堂を調査してみると、多様な子どもたちや、高齢者や障害者を含む多様な地域の人を対象に運営をしている。全ての人たちに開かれた子ども食堂である

ということは、逆に生活困窮家庭の子どもも参加しやすい子ども食堂であるといえる。

生活困窮家庭の子どもを見守り、その子たちが支える問題を解決するのは何も専門家、スクールソーシャルワーカーや民生委員だけではない。地域の人生経験豊かな高齢者や、若く接しやすい「お兄さん」「お姉さん」であることもある。現在の社会の仕組みから言うと、民生委員や家庭支援センターは見守っているが、なにかあれば問題のある子どもは児童相談所の一時保護所に送られることになってしまう。

しかしそれは極端すぎる話で、困窮している子どもたちが気楽に相談できる場所にはならないことが多い。このような場合、子ども食堂は専門家ではないことから、気楽さがあり、困っている子たちが気軽に相談できる環境があると考える。白か黒か、すなわち一般家庭か児童相談所かの選択ではなく、グレーの部分すなわち子ども食堂があるということが子どもたちには救いとなるはずである。

自分が考える子ども食堂の問題としては、継続の難しさである。これまで何回かボランティアに参加させてもらったが、参加者が少なく寂しい食事会になってしまうことがあった。その原因としてボランティアスタッフが少なく、参加定員を制限したため、結果的に参加するハードルを上げてしまい参加人数が少なくなったと考えられる。これは子ども食堂がまだ、地域に根付いていないことを示している。私の他学部の友人も子ども食堂に関しては知ってはおらず、そのようなボランティアがあることさえ知らなかった。テレビなどのメディアで取り上げてられてはいるが、そろばんや習字の塾のような感覚で、もっと身近な存在であるべきであると考える。

参考文献

『子ども食堂をつくろう！人がつながる地域の居場所づくり』NPO 法人豊島子ども WAKUWAKU ネットワーク編著、明石書店、2016 年

『子どもの貧困と食格差　お腹いっぱい食べさせたい』阿部彩・村山信子・可知悠子・鴈咲子編著、大月書店、2018 年